

昨 15 日、頭書のシンポジウムが、「グローバル・インパクトを加速し、SDGs 達成を目指して」という副題付きで、政策研究大学院大学(GRIPS)で開催された。

基調講演として、「なぜ今、インクルーシブ・イノベーションなのか?」(Dr. J. Chataway、ロンドン大学教授)と「より良いものを多くの人の手に。インクルーシブ・イノベーションの可能性」(Dr. R. A. Mashelkar, インド国家研究教授)があり、引き続き「新たな価値創造をに向けたインクルーシブ・イノベーションの可能性」と題するパネルディスカッションが、2 人の基調講演者、Dr. A. Watkins (グローバルソリューションサミット議長)、Mr. V. Mulas (世界銀行スペシャリスト)、Dr. C. T. Ngoc (ベトナム国立科学技術政策研究所シニアフェロー) 計 5 名のパネリストに、飯塚倫子 (GRIPS 教授) と Dr. G. Hane (GRIPS 客員研究員、(株)日立製作所) がモデレーターとして加わり開催された。

まず、当然と言われればそれまでだが、「SDGs 達成」が謳われていることに、SDGs という言葉の「通用性」を再認識した。また、パネルディスカッションの盛り上がりを演出した飯塚倫子モデレータの司会の見事さに感心した。

ただ、「インクルーシブ・イノベーション」という言葉が当然のように語られ、その定義が周知のように扱われているのには、一寸違和感があった。それは、たまたま、タブスコット/ウィリアムズ著「マクロウイキノミクス」(2013) (原著 2010) を読み始めており、その中で、「コラボレーションや集合知で何かを生み出す『ソーシャル・プロダクション』という新たなビジネスモデル」の勃興が語られており、「インクルーシブ・イノベーション」も「ソーシャル・プロダクション」なのではなかろうかと思ったからである。